日本人の神意識

２０１２－１０－１
西九州伝道所
佐々木正明

信教の自由が憲法で保障され、何にも妨げられることなく福音を語ることが出来るにもかかわらず、日本のクリスチャン人口は伸び悩んでいます。いろいろな理由が挙げられ様々な対策が紹介されていますが、神学者や社会学者ではなく、一介の伝道者として感じてきたことがあります。まず、日本人の牧師や伝道者を始めとするクリスチャンたち、さらにそれを教えた西欧からの宣教師や神学者たちの、福音の理解に欠点があったと考えられます。もう一つの点は、誰に福音を語ろうとしているのかという肝心な点が、真剣に考察されていなかったということです

著名な原子物理学者が、研究していることについてお話して欲しいと、幼稚園に招かれて途方に暮れてしまったという話を聞いたことがあります。自分がやっていることといったら、大学を出た人たちにも簡単には理解してもらえそうにもないのに、相手は四歳五歳の子どもです。いろいろ考えているうちに、とうとう子どもに説明できない自分は、原子物理学を本当に理解しているのだろうかと、自信を失いかけてしまいました。

日本で福音を語るとき、つくづく思い知らされるのは、自分は話し方が下手だということです。どうしても分かってくれない日本人たちを前にして、本当に自分は福音を理解して語っているのか、自信を失ってしまいそうです。たしかに、私たちが語っている福音の多くの部分は、西欧人が西欧人の感覚で聖書を読み、西欧人の文化習慣に合わせて適用した「キリスト教の福音」であって、聖書の教えそのものではありません。そのために、日本人の社会生活には馴染まず、日本人的感覚や考え方にも調和しないために、分かってもらえないことが多いのです。

筆者はさきに、「日本宣教のために、しなければならない三つのこと」を著し、この問題について問いかけましたが、今回は改めて、福音を伝える対象である日本人を知るということに焦点を絞り、もう少し考えて見たいと思います。

１．外国の定規によって測られてはならない

たくさんの人たちが日本人についての研究をしてきました。中にはとても素晴らしいものもあります。ただ、キリストの福音を伝えるという視点から、一般的に言えるのは、私たちは西欧で発展させられた人類学や社会学や宗教学、そしてキリスト教神学の偏見で日本人を見て来たということです。日本古来の建築物をインチやヤードの物差しで測っては

なりません。日本の定規で測らなければいけないのです。古代の社会の倫理道徳や政治を、現代の尺度で測ってはならないのと同じです。

敗戦後、日本国憲法の草案に手を貸したアメリカ人女性がいました。日本で育った彼女はかなり日本のことを理解しているつもりでしたが、日本では女性が差別され抑圧されていると、西欧の物差しで計って判断していましたので、女性にも参政権を与えるべきだと強く主張したのです。日本の女性が差別されていたことは事実であり、女性にも参政権を与えることは正しかったと思います。ただ日本女性は昔から、西欧キリスト教諸国で女性が差別されていたほどには差別されていなかったので、参政権を得たからと言って、一部の「進歩的女性」たちを除いては、それほど大喜びをしたわけではありませんでした。

私たちは今、西欧キリスト教の色眼鏡で見た日本人観、西欧の物差しで計った「基準に合わない日本文化」の理解をいったん横に置き、もう少し公平な目で見直してより正しい理解を持った上で、その日本人に分かりやすく、受け入れられやすく福音を語りたいと思います。

２．複雑な日本人の神意識

福音を語る対象の日本人を理解するとなると大変な仕事で、表面だけ扱うだけでも膨大な量の書物が出来上がってしまいます。ここでは日本人の宗教意識、あるいは神観に的を絞って語りましょう。

日本人の神意識は複雑です。というより、日本人自身が良く理解していないで、たくさんの矛盾した概念を持ったまま、混乱の中に生きているのです。これは何も日本人だけに限ったことではないかもしれませんが、日本人の場合は、とにかく、目も当てられないくらい混沌としているのです。ですからこれは、言うほどに簡単ではありません。それでも、雑多に散乱している日本人の宗教観、あるいは神概念をできるだけ整理して、正しく理解することが欠かせないのです。（ただしここでは、ヒンズー教に根源をもつ仏教的な神、あるいは仏の権化とされてしまった日本の神々ではなく、日本古来の神道的感覚の神観についてだけ考察して行きます。）

３．アニミズム

日本人は、基本的にアニミズムの宗教観の中に生きています。いま私たちが生活しているこの世界は、普通、私たちの目に見え手で触れることができるものと、目に見えない次元とそこに住む目に見えないものたちとが、重なり合い、互いに影響し合いながら生きているものと考えられています。多くの日本人は、理屈の上では半信半疑でも、いつも幽霊や怨霊、死霊、背後霊などと呼ばれる不可思議なものに取り囲まれ、森の霊、川の霊をはじめとする様々な自然物に潜む霊と、いっしょに生きていると感じているのです。中にはお化けや妖怪まで実在するという人さえいます。

唯物論的世界観を展開し、科学的考え方を主張して、迷信に惑わされてはいけないなどと、もっともらしく語る日本人もたくさんいて、神など存在しないと言う人すら少なくありません。それがあたかも科学的で現代風に聞こえるのですが、実はその人たちの多くも、良く話し合ってみると、科学では測ることも証明することも出来ない、アニミズムの世界を感じながら生きているのです。うわべだけ科学的であるように装い、唯物論を振り回してはいますが、本当のところは、アニミズムにどっぷりと浸り、夏になると、馬鹿馬鹿しいと笑いながらも怪談話に肝を冷やし、幽霊話に鳥肌を立てているのです。

進化論的な宗教学者によると、アニミズムは原始的な宗教形態だということですが、アニミズムは世界中のいたるところにあり、21 世紀の現代科学を専攻している学者の心にもあるのです。それなのに、啓蒙主義に道を譲った西欧キリスト教神学では、アニミズムを嘲笑するきらいがあります。彼らの住む社会でもアニミズムの感覚が一般的であり、たくさんの幽霊が存在し、天使や悪霊や妖精や魔術師や魔女などが登場することに、目を瞑っているのです。

そればかりではありません。聖書自体がアニミズムの世界観の中で、アニミズムを背景に書かれているのです。聖書が書かれた当時の、周囲の人々がアニミズムの中に生きていたというだけではなく、聖書記者たちがアニミズムの感覚を持ち、アニミズムを前提に聖書を記しているのです。聖書に登場する悪魔、天使、悪霊、幽霊などと呼ばれるものの存在、あるいは「すべての支配、権威、権力、主権の上、今の世ばかりでなく、次に来る世においても」などという表現は、異次元にも及ぶアニミズム以外のなにものでもありません。

ですからアミニズムは非キリスト教的でも反聖書的でもなく、聖書が認めている世界観であり、宗教観なのです。このところを良くわきまえて、福音を語らなければなりません。啓蒙思想に影響され、理神論的な感覚の信仰を持つようになった、多くの西欧キリスト教の流れでは、現代の奇跡を信じられなくなったと同時に、悪霊もその活動も信じられなくなっています。日本の伝統的教会のなかでも、それがあたかも正しい信仰であるかのように語られています。

幸い私たちのペンテコステ信仰は、そのような啓蒙思想の流れに逆らって誕生したもので、様々なアニミズム的感覚を認め、私たちの間で悪魔や悪霊たちが盛んに活動していると信じています。悪霊追い出しも病気の癒しのための祈りもごく一般的です。そして、実際に奇跡を見、悪霊が追い出されるもの見てきました。

現実の問題として、私たちの周囲には、幽霊だの悪霊だの怪奇現象だのに悩まされている人たちがたくさんいます。逆に様々な霊にお伺いを立て、金銭をささげ、犠牲を払っている人たちもたくさんいます。そのようなものの存在を前提に、悪さを企む宗教も後を絶ちません。彼らの感覚や彼らのやっていることを、迷信だといって笑うのは簡単です。で

もそれでは彼らの問題を解決することは出来ませんし、効果的に福音を伝えることも出来ません。

たとえ彼らの感覚の大部分が、単なる民俗信仰に基づく迷信であったとしても、彼らにとっては現実の悩みであり、現実の幽霊だったり現実の怨霊だったりするわけです。わたしたちは、そのような人たちの感覚を冷笑するのではなく、現実の悩み、現実の問題として対処しなければなりません。単なる迷信ですと教えなければならないことも、錯覚に過ぎないと理解させなければならないことが多いのも事実です。しかし、すべてがそうなのではありません。

ただ私たちの間で、ここ四十年ほどしばしば問題になってきたのが、行き過ぎたアニミズム感覚です。これは主に、表面的現象でペンテコステ信仰に影響を受けながら、聖書の学びに遅れを取っている、カリスマティックや第三の波の人たちの間で見られるものですが、私たちペンテコステの信仰にも、当初から彼らのような傾向を持つ者たちがいましたし、現在でもそちらの舞台で踊る人たちが結構たくさんいるということです。

これらの人たちによると、すべての病気は悪霊によるもの、怪我や事故も背後にいる悪霊によるものとなってしまい、なんでも悪霊追い出しでけりをつけてしまう事になります。食べすぎてお腹を壊しても、悪霊のせいになってしまうわけです。悪霊たちが、嘆いている声が聞こえてきそうです。「ペンテコステの連中が、自分たちの失敗や悪い癖で体を壊したのに、また、俺たちのせいにしている。」

罪や悪癖の背後に悪霊の働きがあることもすくなくはありませんが、いつもそうだとは限らないのです。イエス様は、様々な病気が悪霊の働きの現れであることを認めておられましたし、実際に、悪霊を追い出して病を癒しておられます。しかしその一方で、悪霊を追い出さずに、病気をお癒しになった例もいくつもあります。「悪霊を追い出し、病をお癒しになった」という聖書の表現が、悪霊を追い出すことによって病を癒されたということなのか、あるときは悪霊を追い出し、他のときは病をお癒しになったということなのか、明瞭ではありませんが、他の記述から考えると、あきらかに後者だと判断できます。

私たちは何でも悪魔や悪霊のせいにするのはやめて、冷静な判断をすべきです。とはいえ、医学的に見てこれは単なる病気だから、悪霊の働きではないという判断も避けるべきです。医学的な判断は医学の問題であり、霊的次元の判断はまた別のものだからです。実際の伝道牧会の場において、対処が求められるとき、悪霊追い出しをすべきか、キリストのみ名の権威によって、病に命じるべきか、病の癒しを祈るべきか、判断に苦慮することも出てきます。このあたりは、聖書には書かれていませんので、経験によって判断する以外にありません。臨床医学のようなものです。様々な症例をもって判断するのです。判断の基準は聖書の教えと、そこに現れている現象です。

筆者も宣教師として、悪霊の活動が非常に顕著な未開部族の間で働いてきましたので、

そのような場に出くわしたことが幾度もありました。悪霊の追い出しも癒しも経験しました。本当は悪霊の働きではなかったのに、悪霊だと勘違いしたこともありますし、その反対だったと、後になって思うこともありました。でも、そのようなことにあまりこだわらない方が良いのです。私たちはキリストのみ名の権威によって働いているのです。私たちが少しばかりの間違いをしたから、神は私たちの願いや祈りをお聴きにならないということではないからです。ただ、経験上から言わせてもらうと、悪霊の存在を感じたときには、単に病気の癒しや症状の改善を祈るのではなく、キリストのみ名の権威によって、大胆に悪霊を叱り、追い出すのが効果的です。

私たちは、様々な霊や怪奇現象で悩まされている日本人がいるならば、その人たちの世界観や恐怖を迷信として笑ってしまうことなく、現実の問題として真剣に取り扱い、寄り添いながら福音を提示し、神の助けの手を期待させるべきなのです。ペンテコステ信仰を持つ私たちには、それが出来るのです。ただしくり返しますが、私たちは正しい聖書理解に立つ信仰を大切にしなければなりません。現象だけで走り回り舞い踊るのはとても危険です。聖書の信仰を離れ、異教的なアニミズム信仰にはまり込んでしまうからです。

神が、「ありてあるもの」としてモーセに現れてくださったとき、モーセも一般のイスラエル人たちも、間違いなくアニミズムの世界に生きていました。その中で神は、ご自分がその辺に転がっている多くの神々の中のひとりではなく、唯一絶対の、比べ得る者がない存在者であることを示すために、多くの努力を重ねてくださいました。天地創造の物語の提示も、数々の奇跡もその努力の一つです。しかしイスラエル民族が、自分たちの崇めている神は、多くの民族が礼拝している神々とは次元の異なる神、唯一のお方であると理解するまでには、千年以上もの時間を必要としました。神は実に忍耐深くお待ちになっておられるのです。

日本人がそのアニミズムの感覚の中で、唯一絶対の神、次元が異なる神、天地の創造者なるお方を認めることが出来るように、私たちも努力をしなければなりません。ただし、急ぎすぎてもならないのです。また日本人は、クリスチャンになるためにアニミズムの世界観を放棄する必要もないのです。少しばかり修正の必要はあると思いますが、イエス様もイエス様の弟子たちも、みな、アニミズムの世界観を持ちながら、唯一絶対の存在者を信頼していたのです。

５．　多神論

ふつう日本人は多神論者であると分類されています。八百万と表現される多くの神々を信じていると言われていますがが、それはあまりにも表層的な見方です。むしろ、日本人はそのような多くの神々を信じてはいないと言ったほうが、事実に近いと思えます。混乱の理由の一つは、神という言葉にあります。神とは何かという定義の問題です。ここに、少しでも西欧キリスト教的感覚の神定義を適用しようとすると、誤りに陥ります。

日本語の「神」はキリスト教の神観とは全く関係のないところで理解され、用いられてきた言葉です。それを後になって、キリスト教が借用しただけのことです。ですから、キリスト教の感覚で神を理解せず、もともとの日本語の神と言う言葉に帰って、見直さなければなりません。本来の日本語では「神」でさえなく、「ＫＡＭＩ」と発音されていたものです。「神」は、中国から文字が輸入されたとき、日本語に当てはめられた文字に過ぎません。ですから、他の漢字が当てはめられたこともあるのです。もともとの日本語の「ＫＡＭＩ」とは、「ＵＥ＝うえ」という意味でした。今でも「ＫＡＷＡＫＡＭＩ＝川上」、「ＫＡＭＩＧＡＴＡ＝上方」、「ＫＡＭＩＮＯＫＥ＝髪の毛」などという言葉で残っています。それが人間に用いられると「普通の人より上」と言う意味で、役所で威張っていることが出来た人たちに当てはめられ、頭、長、守などの「ＫＡＭＩ」が用いられた他、それぞれの役所によって異なった漢字が借用されていました。「お上にも情けはある」という言い方は、今でも時代劇で普通に用いられていますし、「上様」も一般的です。

ですから、普通の人間より何かが優れ、何かで力を持つ者はすべて「かみ」とされたわけです。現在でも、腕利きの料理人は料理の神様、野球のうまい人は野球の神様、チームの秀でたプレイヤーは守護神、手術のうまい外科医は神の手を持つ男。もちろん女神だってありうるわけです。そんなわけで動物でも植物でも、自然界において人間より何かの点で優れていると考えられると、何でも神になり得たのです。こうして、日本には多くの神々が存在するようになりました。そして、通俗信仰として、それらの優れた点が強調されて、信仰の対象になり得たのです。鼠だって、子宝に恵まれない女性には多産と繁栄の象徴として、立派に神の役目を果たせたのです。

とはいえ、このような神々はまじめな信仰の対象になることは稀でした。むしろ縁起担ぎや、あやかりたいという願望の表現として見るべきものです。あるいは、日本人は、それらの目に見える「神」の資質の背後に本物の力ある存在が控えていると感じ、目に見える神々の性質を目に見えない力ある存在者の現われ、あるいは権化として捕らえ、目に見える低次元のものを通して目に見えない高次元のものに祈りや願いを捧げているのだというのも、あり得る考え方です。事実、筆者が近隣の祠などで祈願している人たちを見かけてはお話してみたところでは、蛇なら蛇、狐なら狐に祈願していると考えている人は少なく、それらに現れている資質を与えている背後の何ものかに、願っているという感覚のほうが強いのです。このあたりの日本人の感覚は非常に曖昧で、要するに、その背後の「何者か」が誰なのか分からないまま、何かに祈らずにはおれないという人間の本能の発露として、祈っていると言ったほうが良いのかも知れません。

このように、日本人が信じていると言われる多神教の神々は、単に「うえ」であるというだけの低次元の発想であるために、多くの日本人は、「神は存在しない」と公言してはばからないのです。彼らはキリスト教の神概念を理解し、その神を念頭に置いた上で「神は存在しない」と言っているのではないのです。それにもかかわらず、プロテスタントキリスト教が日本に入ってきたとき、天地を創造された方を指すのに「かみ」という日本語を選択したために、「神はいない」という「神の部類」の中に入れられてしまったのです。で

すから、神はいないという日本人と、「いや、神は存在する」と議論をしても始まらないのです。

かえって私たちは、神はいないという日本人に大いに同調できるわけです。彼ら自身が良く理解しないまま、神はいないという場合の神について、少し整理をしてお話してあげると、大抵の日本人は納得するのです。そして私たちクリスチャンが、翻訳上とりあえず「神」とお呼びするお方は、そのような神とは全く異なる方であることを説明してあげるのがいいのです。

場合によっては、聖書の最初の部分が書かれたときも、天地創造の存在者をなんと呼んだらいいのかという問題があったことを、お話してあげるのも面白く、興味を引くことでしょう。天地の創造者である私たちの神も、最初にご自分を人間に現されたとき、ご自分を何とお呼びになるかという問題があったのです。人間の理解力の不足のために、モーセに現れてくださったときの「ありてあるもの」という名では、なんとも不明瞭でした。そこで、当時、周囲に生きていた人たちの信仰の対象である、「神々」の名を借用しなければならなかったのです。でも、そのままでは周囲の神々と同じように、低次元の神々のひとりに過ぎないと見られてしまいますので、神は天地創造の物語を非常に単純化して持ち出し、ご自分が周囲の神々とは全く異なる大きな力強い存在、次元の異なる存在者であることを示して、自己紹介をしてくださったのです。

ですから旧約聖書の時代は、キリスト教の母体であるユダヤ教では、一神教ではなかったのです。少なくても、キリスト誕生前の数百年前までは、多神教であり、ただそれらの神々の中で、天地を創造なさった神こそが自分たちの神であると認めて、その神だけを信頼し、その神だけに礼拝をささげていたという意味で一神教だったのです。そのために、いわゆるパワー・エンカウンタリングということがしばしば行われたわけです。

現在の日本において、私たちは他の神々の存在を否定する必要は全くありません。彼らが神と呼んでいるものと、私たちが「神」とお呼びするお方とは、全く異なったもの、次元の違うものだからです。プロテスタントキリスト教が「神」という翻訳語を選んでしまったことが、大きく影響を及ぼした混乱です。カトリックのように「天主」という言葉のほうが良かったのかも知れません。日本人は日本人の「うえ」に過ぎない神々の存在を認めていても、絶対者、天地の創造者である「天主様」だけを信頼し、畏れ、礼拝していればそれでいいのです。

もしもキリスト教が、他の神々の存在に対して敵対意識を持たずにいたならば、福音宣教ももっともっと穏やかに勧められていたはずです。もともと神道的感覚では、神がひとりやふたり増えてもなんの問題も無いのですから、おおらかに受け入れてくださったはずです。そして、私たちの信じているお方は、とりあえず「かみ」という名を借用して呼んでいますが、天地を創造なさった方であり、人間をご自分に似せてお造りになった方であり、日本と日本人をその大きな愛と恵みをもって、豊かに祝福し続けてこられたお方です

と、基本的なことを教えてきたならば良かったのです。

おもしろいことに、日本人は様々な霊的な存在、つまり、幽霊だとか怨霊だとか言うものを信じていますが、「神」は信じていないのです。そして、それらの怨霊や背後霊、あるいは魑魅魍魎を、神とは認めておらず、神々と混同することもあまり無いのです。日本人の宗教感覚では、アニミズムの世界と多神論の世界が重なっているようでありながら、別の世界にされているのです。このあたりは、さらに観察と学びが必要だと感じています。

４．汎神論

日本人の多くは、多神論的な信仰を嘲笑し神々の存在を否定しますが、汎神論的な感覚は非常に大切にします。多神論の神々は汎神論的な感覚の安易な表現であると見ることさえ可能です。この大木には神の霊が宿っているという感覚から、この大木は神だというまでは、半歩の違いしかありません。ただ、大多数の日本人は、大木に霊的なものが宿っているとは認めても、大木が神だと言い切るところまでは行かず、紙一重のところで留まっています。いわゆる偶像礼拝には陥ってはいないのです。日本人古来の宗教意識に、偶像が存在しないということは非常に大切な事実です。

西欧キリスト教神学では、一般的に汎神論をキリスト教とは馴染まないものと考えて来ました。しかし聖書を読むと、汎神論の基本的感覚は聖書の神と矛盾するものではありません。汎神論の神が多神論の神々と考えると、聖書とは合致しなくなりますが、天地を創造された唯一のお方が、すべての被造物に内在しておられると考えると、聖書の教えと全く一致するのです。私たちが礼拝しているお方はすべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられるからです。（エペソ４：６）そしてすべてのものがそのうちに存在し、生き、活動しているのです。（使徒１７：２８）空間と時間と次元を超越して存在するこのお方の外側、すなわちこのお方が存在しない空間や時間はあり得ないのですから、宇宙自体がこのお方の内に収められているのです。

日本人の汎神論的感覚は、一方では多神論の感覚に近いものでありながら、実は一神論に非常に近いという一面を持っています。本筋においては一神論的な汎神論でありながら、混乱し堕落していくと多神論の方向に向かうと理解するのが良いように思われます。

私たちが日本人に福音を伝える場合、日本人の汎神論的感覚を嫌悪せずに、穏やかに話し合を進めるのが肝要です。日本人がすべての自然物の中に神を認めることが、聖書の教えからも正しいと認めて、共通の土台を作った上で天地の創造者の話に進むのが良いからです。あらゆる物に潜んでおられるのが、多くの神々ではなく、ひとりの神であり、様々なものの形や性質の違いに、ひとりの神の様々な様相が現されていると説明することができます。私たちにとっては、すべての自然物は神の性質の現れであり、神の自己表現に他ならないからです。

日本人が大海に乗り出し、深山に入り、その自然の大きさに心を打たれ、思わず何ものかに手を合わせたくなるとき、多くの神々をではなく、ひとりのお方を想定するという事実は、非常に重いものです。確かに漁師は海の神を大切にし、農業を生業とする人たちは、作物を稔らせる神を大切にします。ところが、彼らは全く別の神々を大切にしているのではなく、漁師には漁師の神として現れてくださるお方、農業を生業とする人たちには作物を育ててくださる神として現れてくださるお方を、信じている様相が強いのです。

筆者の住む小さな漁村（今は市に合併）は、日本一のイリコ（煮干）の産地です。漁の季節になると、数センチの小魚が一日何十トンも水揚げされ、茹でられ、乾燥されて、イリコに変わっていきます。いったい何匹くらいの魚なのか、見当もつきません。イリコ漁師のなかでも一番大きな船団をもって操業している筆者の隣人は、工場の敷地に「魚魂碑」なるものを建てています。これなどはアニミズムの感覚や多神論の感覚ではなく、むしろ汎神論的感覚の表現だろうかと思います。一匹一匹の小魚の魂に感謝を捧げるのではなく、むしろ小魚全体の、あるいはしばしば間違って網に入る、大きな魚たちも含めて、それらのなかに潜み、命を与えておられる何ものかに感謝をして尊んでいるのでしょう。

ただし、これが汎神論的感覚からか多神論的感覚からかと、碑を建てた本人に聞いてみたところで、曖昧な答えしか返ってはきません。そういえば、割り箸の供養をしている割り箸工場のことがテレビに出ていました。昔から針供養というのもありました。これなどは仏教的感覚が混じっているように見えます。

私たちはこれらの混乱した宗教感覚を責めたり嘲笑したりするのではなく、それらを正しい理解にいたる橋渡しとして用いるべきだと思います。日本人は聖書もキリスト教神学もないまま、長い長い年月、放って置かれたのです。放って置かれた日本人が悪いのではなく、全世界に出て行って福音を宣べ伝えなさいと命令されていながら、その命令を軽んじて、放ったままにして来た教会が悪いのです。

自然の美しさ、微妙な彩どり、雄大さ、深遠さ、悠遠さなどに触れると、私たちはそれらをお造りになった「神」を褒めます。しかし日本人に対しては、ただそれらをお造りになったと語るだけでは足りません。その中に潜んでおられる「神」を認めてあげることも大切なのです。そして、実は天と地をお造りになったお方は、この全宇宙に満ちておられる方であり、全宇宙がこのお方の中に収められているのだということを、教えてあげると良いのです。

７．　唯一神論

再三述べているように、日本人の神観は強い一神論的傾向を持っています。日本中に神社があり祠があり、それぞれ発祥のいわれがあり歴史があって、祀っている神も異なっていますが、それらに参詣する人たちの気持ちはいちいち変わることがないのです。八幡様でも天神様でも金比羅様でも宗像様でも住吉様でも、その他どのようなものを神として祀

っている神社だったとしても、全く同じ心でわざわざ祀られている神の名を呼ぶこともなしに、手を合わせ、感謝を捧げ、お願いをするのです。それは大きく有名な神社だけではなく、村の鎮守の神でも、祠でも社でも同じです。

この点について参詣者たちと話をしてみると、一様に、そのようなことを考えたことも無かったけれど、たしかに、どこの神、何の神、誰それと言う神に関わりなく、全く同じ気持ちで礼拝していると語っています。宮司さんに聞いて見たところ、普通の人が礼拝しているのに、自分の神社の神にこだわって指導する必要はないということでした。お賽銭さえ戴ければということでしょうか。一口で言うとおおらかなのです。それらのことから、日本人はキリスト教が言うような神学は持ち合わせておらず、細かい説明はできないけれど、広くゆったりとした感覚で、唯一のお方を信じていると思われるのです。

日本人が、本当に心に感じ感謝し礼拝しているのは、「神」と呼ぶものとは異なっていると考えざるを得ないのです。日本人は「うえ」に過ぎない「神」は信じていないのです。それぞれの神社で祀られているのは神々であったとしても、それらの神々はその背後におられる、もっと大きく気高く尊いお方の権化（仏教の言葉を借用しますが）あるいは現れ、手づるとして用いられているに過ぎないと、直感的に感じているのではないかと思うのです。ですから参詣者たちは、表面上はそれぞれの神を礼拝しているように見えながら、その実、それらの神の背後にいらっしゃる、もっと大きく豊かで力あるお方に礼拝をささげているわけです。多くの日本人はそのようなことをあえて意識しないままに、そのように行っているのです。

そのような日本人の宗教意識は、神社もない、祠も社もない大自然の中にいても変わりません。富士山には富士山の神がいて、富士山独自の神社が建てられているように思われている節もあります。剣山にも、高尾山にも、御嶽山にも、およそ山と呼べる山にはそれぞれの神がいて、神社が建てられています。でもそれらの神々が別々の独立した神だとは、誰も感じていません。ただ、理屈付けようとするとたちまち混乱して、低俗な神意識に堕落してしまいます。神無月にはすべての神々が出雲に集まって、あらゆる事柄のマッチングをするなどという、俗っぽい話に転がってしまうのです。無限の神を有限の頭で理屈付けようとするからです。

そこで大概の日本人は、分からないところを分からないままにしておいて、心の奥深くに感じている、すべてを超絶しておられるお方を崇めて感謝するのです。そして、理屈付けられた部分は神話、つまり信じなくても良い部分として片付けているのです。

日本人はこの背後におられる方を非常に尊んで、名前を付けることも、言葉で説明することも、絵画で表現することも、彫刻で可視化することもしません。そのようなことをするにはあまりにも畏れ多いお方なのです。ですから、本能で直感的に感じるまま、それ以上は分からないままにそっとしておくのです。この点、ギリシヤ思考によって発展させられた西欧キリスト教神学とは、鋭い対比を見せています。神学を学んだキリスト教徒から

見ると、日本の神観の曖昧さや朧げさには、あきれ返ってしまうところですが、見えない大きなお方を尊ぶ日本人の感覚からすると、まな板の鯉のように切り刻んで天地の創造者を説明するキリスト教は、冒涜の罪を犯していると思われても不思議は無いはずです。それは旧約聖書が、天地の創造者を偶像化することさえ禁じたのに似ています。天地の造り主を象徴化して礼拝することさえ冒涜なのです。

日本人は自然に親しみ、自然を神と感じるところがあって、すぐにも汎神論と繋がりそうなのですが、その場合、たくさんの神々の汎神論ではなく、唯一のお方がすべてのものの内に、また背後にいらっしゃるという「聖書的汎神論」に近いと判断されます。ですから、日本人が生かされていること、食べ物、着物、家族、住む場所、美しい環境を与えられていることを感謝するとき、意識するのは多数の神々ではなく、なんとお呼びしてよいのかわからない、名前も知らない姿もみたことがない、お一人の存在者なのです。たとえ神社も社も祠もない山の上でも、森の中でも田んぼの中でも野菜畑の中でも、このお方に手を合わせ、ありがとうございますと頭を垂れ、地域の人々総出で祭りをし、ともに生かされていることを祝い、みんなで感謝を捧げるのです。

私たちは、日本人が心の奥深くで感じている本能的神観を大切にして、それを強調することによって天地創造の神について話を進めることができます。人間が神の姿に似せて造られたという創世記の記述を足がかりに、人間の心の奥深くに潜んでいる本能的神意識について話をすることが出来ます。人間は、神ご自身によって、神ご自身に似せて造られていて、神と心を通わすことが出来る霊的な存在者であるために、どれほど頭で神の存在を否定しても心は神を感じ、神に祈ろうとする気持ちが起こり、感謝を捧げたいという思いが湧いてくるのです。これはすべての民族に共通の本能です。すべての人間は祈るのです。

８．偶像を礼拝しない日本人

すでに幾度も語っていることですが、日本人の宗教的特性に、偶像礼拝をしないということが上げられます。多くのクリスチャンにとって、これは納得できない言い方かもしれません。クリスチャンにとっては、キリスト教以外の宗教はみな偶像礼拝だと、教えられていることが多いからです。ですから、キリスト教は偶像礼拝ではないと、単純に思い込んでいるクリスチャンが大多数です。

「偶像礼拝」の定義にもよりますが、筆者は欧米の一般キリスト教徒よりも、日本人のほうが偶像礼拝をしていないのではと思うほどです。カトリックには偶像が溢れています。正教にも偶像があります。もちろん、カトリックは否定し、正教はとんでもないということでしょう。私はカトリックが準国教並みに扱われているフィリピンに、長い間住んでいましたので良くわかります。また、プロテスタントの文化にも多くの偶像があります。ですから、徹底して偶像を嫌う回教徒からすると、キリスト教は偶像教なのです。

日本古来の神道に偶像はありません。仏教が入ってきて神道と混合していく過程で、偶像礼拝の習慣もすこしばかり神道に入り込んで来ました。たとえば同祖神などは、神道的通俗信仰の偶像として、代表格といえるでしょう。しかし本来の神道は、基本的に、今でも偶像を持ちません。見えない神を見えないままに尊んでいるのです。見えない大きな神は、どのような偶像によっても表現できないと感じているのです。日本中に神社がありますが、ご神体といわれるものが実際に祀られている例はあまりありません。何らかの象徴的物体が置かれている場合はあるようです。しかしそれはご神体そのものではないのです。ご神体なるものがあったとしても、それが神であるとは考えられていません。あくまでも、神の依代（よりしろ）、つまり神が宿るものあるいはそれを象徴するものにすぎないのです。

神道は、ローマ人への手紙第一章で言われているような、偶像礼拝の罪を犯していない、珍しい宗教なのです。偶像礼拝の半歩手前で踏みとどまっているのです。つまり、目に見えない神の永遠の栄光を、朽ちる人間や獣や鳥や這うものの姿に変えてしまう、愚かさには陥っていないのです。聖書もなく、キリスト教の福音もないまま、日本はかなり良い国として発展してきました。戦国時代の終わりに日本にやってきたカトリックの宣教師たちは、日本人たちの勤勉さ、高い道徳観に驚嘆しています。彼らの本国に勝るとも劣らないものだったからです。

現代でも、日本はキリスト教国ではありません。しかし、多くのキリスト教国に肩を並べることが出来る国です。国全体の倫理性や生産性を取り上げても、キリスト教国に引けを取りません。筆者が思うに、その理由は、神が日本あるいは日本人を、偶像礼拝のゆえに恥ずべき欲望のままに突き放しておられないからです。日本人は、ローマ書一章が言う偶像礼拝の罪に完全に陥ってはいないのです。

日本人に伝道をするとき、この偶像を持たない日本人の宗教意識、神観を取り上げ、日本人がいかに優れた宗教意識を持っているか、気づかせてあげるべきです。聖書を持ち、長いキリスト教の歴史を持っている西欧キリスト教諸国の多くが、倫理的にも生産的にも日本に及ばないという事実に目を向けさせるべきです。

もちろん現代の日本の繁栄は、必ずしも日本人の倫理性の高さや生産性によるものだけではないのですから、誇りすぎてはなりません。筆者は敗戦後の貧しさの中で育ったものです。数ヶ月前までは敵として殺し合っていたアメリカが、薬を送ってくれました。食料も衣料も届けてくれました。私たちはそのお陰で、栄養失調そこそこで生き残ることが出来たのです。奨学金を出して、留学までもさせてくれました。現代日本の富の平均化は、マッカーサーが敢然として行った、農地改革と財閥解体によるところが大きいのです。いくら日本人が勤勉だからと言っても、農地が大地主に占領され、経済の大部分が財閥の手に握られていたのでは、今の日本の自由な発展はあり得なかったのです。

私たちはアメリカにも感謝しなければなりません。個人的な好き嫌いは別にして、マッカーサーにも、日本の戦争責任を追及せずに赦してくれた蒋介石にも、感謝をしなければ

ならないでしょう。しかし、そのような歴史の取り扱いの背後には、偶像礼拝をしていない日本国民に対する、神の取り扱いがあったと思われるのです。たとえ天皇を現人神として崇拝したとしても、それは聖書が言う偶像礼拝まで落ち込んではいない、少しばかり性質の異なるものだったのです。

９．日本人の宗教感覚を大切にする

さて、上記のような宗教観、あるいは神意識をもって生きている日本人に、私たちの天地創造の神の救いを、どのように語ればよいのでしょう。まず大切なことは、日本人と日本の文化と日本人の宗教を尊重して、決して敵対せず、あしざまに言わないことです。彼らに敵愾心を起こさせないことです。確かに、日本を始め、世界中のどの宗教にも救いはありません。救い得るのはキリストだけなのです。また宗教には非常に悪いものもありますが、すべての宗教が悪いのではありません。日本の宗教、特に神道はすばらしい宗教の部類に入ります。日本という国が、西欧キリスト教国に比べても引けをとらないほど、あらゆる面でしっかりしているのは、神道と仏教という宗教があったからだとさえ言えるのです。

冷静に考えてみてください。もしも日本に神道がなく、アジアやアフリカに普通似見られるような宗教が発展していたとしたら、日本はどうなっていたことでしょう。もしも仏教が伝来せずに死者の弔いも出来ず、血族親族関係もうまく作れないでいたとしたら、日本の社会の安定や発展は望めたでしょうか。日本人の精神生活はどれほど混乱していたことでしょう。私たちは、神道と仏教には感謝と尊敬の念をもって、取り扱うべきです。

神道はキリスト教に導くための宗教ではありません。仏教もキリストの救いへの道標にはなりません。しかし、神道も仏教もキリスト教の敵ではないのです。多くの誤りを持っていることでしょう。しかし、素晴らしい宗教であり、日本人はそれらの宗教の多くのものを負っているのです。

今までのキリスト教、私たちが西欧キリスト教から教えられたキリスト教は、旧約聖書の教えも新約聖書の教えも理解しそこなって、キリスト教以外の宗教をすべて忌むべき偶像礼拝、憎むべき邪教と断定して攻撃を続けてきました。その結果、日本の宗教も日本人も正しく理解することが出来なかったばかりか、ほとんどの日本人を敵に回してしまったのです。敵対する人たちの教えを聞いて、素直にそれを受け入れる人はありません。異邦人というものを理解する必要を感じなかった、西欧キリスト教文化に生きていた人々の独善的な感覚をもろに輸入してしまった、日本のキリスト教の過ちをいつまでも続けていてはならないのです。

１０．　神の忍耐に学ぶ

聖書は人間の宗教本能、神を礼拝したいという本能とその行為を、悪と決め付けてはい

ません。それは神に似せて造られ、神を礼拝するように造られたという、人間の本能、人間が人間である事の証です。神を正しく理解していないと言うのは、罪の結果であって罪そのものではないのです。問題は、人間が神の許を追放され、神のいない社会を築き、神を見失ってしまったということなのです。

ところがそのような人々の中から神はイスラエル民族を選び、彼らにご自分を明らかにされた上、ご自分以外の神々を礼拝することを禁じられたのです。神が偶像礼拝を禁止なさったのはすべての民族ではなく、決して間違うことが無いほど明確にご自分を現してくださった、イスラエル民族だけなのです。当然、神を明らかに体験したクリスチャンも、偶像礼拝をすべきではありません。しかし、神を知らない人たちが偶像礼拝をしていても、神はイスラエル民族に対するような怒りをもって、お裁きになるようなことはないのです。

また、神を体験し、神を理解するということが一瞬の出来事ではなく、かなり長い期間にわたって少しずつ天地の創造者について知り、神の力を体験してからのことなのです。ですから、日本人クリスチャンが、クリスチャンになると決心したからと言っても、直ちに偶像礼拝を完全にやめることを期待してもならないのです。どうか、旧新約聖書をしっかりと読み直してください。正しい神を信頼すると言うのは一瞬のできごとではなく、長いプロセスの中で起こることなのです。

私たちは、天地の創造者がアブラハムを選び、イスラエル民族を興し、たっぷりと時間をかけ、多くの奇跡と不思議を繰り返してご自分を現し、イスラエル民族がご自分だけを礼拝するように、忍耐をもって教育されたことを思い出さなければなりません。十戒をもって偶像礼拝禁止の命令を与えるまで、たっぷりと数百年を費やしておられるのです。くり返しますが、私たちは忍耐をもって、時間を用いて、日本人に天地を創造してくださった絶対者を教えていくべきです。他の宗教をとやかく言う必要はありません。偶像礼拝を厳しく禁じたのは、イスラエル人に対する神様のお取り扱いです。

おわりに・橋渡しの重要性

新しい物事を教える場合、必ず、知っていることから知らないものへの「橋渡し」が必要です。

義理の息子が、南米産だという瓶入りの赤い辛子を、土産に買ってきてくれました。いわく、「タバスコの３０倍は辛いから、ダディ、気をつけて」

なるほど、うどん一杯に、その辺で売られている小瓶一本分の唐辛子を全部入れても、平気で食べることが出来る私にもこれは辛いと思わせる代物でした。息子は、私が知らない辛子の激烈な辛さを、タバスコという馴染みのあるものを橋渡として用いて説明したのです。下手にタバスコぐらいを想定してうどんに入れてしまったら、いくら私でも、食べられなかったことでしょう。

日本人に天地の創造者、絶対の神、すべてのものを超絶した存在者について教えるためには、日本人の宗教観、神意識を橋渡しとして用いなければならないのです。その橋渡しをすべて敵視して焼き落としてしまったのでは、通じることも通じなくなってしまいます。